

原発事故 使えぬ避難路

北陸電力志賀原発（石川県志賀町）が建つ能登半島で最大震度7を観測した地震は、2011年の東京電力福島第1原発事故を思い起こさせた。複合災害による建物や道路の損壊は、どの原発の周辺でもありえる。それだけに、原発事故に備えた避難計画通りに物事が進まないのでは、という疑念が芽生えている。

陥没・寸断計画は「絵空事」

1月1日の地震で、志賀町では震度7を観測した。原発から約2キロの福浦港地区に住む区長の能崎亮一さん(66)は、自宅でドンと突き上げるような衝撃の後、大きな横揺れを感じた。近くの避難所には数百人が逃げている、一部は建物に入りきらず車中泊を強いられた。「地震直後は避難所の運営のことで精いっぱい。原発のことはほとんど頭になかった」

この時、志賀原発で放射性物質が漏れ出すような損傷はなかったが、複数ある外部からの電源の回線が一部途絶えるなどのトラブルがあった。

能崎さんがそれを知ったのは、翌2日夜。ニュースを聞いた人から伝えられた。「原発で何かあったら、電力会社や町から連絡が来るものだと思っていた。情報がなく不安を感じた」

女川 選択肢の拡大痛感

東北・三陸海岸の最南端に位置する牡鹿半島(宮城県)も似た地形だ。海沿いの一本道に細い脇道しかなく、同じような被害が懸念される。

相野谷裕明さん(67)が行政区長を務める女川町旭が丘地区は、半島の付け根に位置する。記者は相野谷さんの車に乗せてもらい、そこから西の石巻方面へ向かった。国道308号を車で5分ほど走ると、右の車窓

には山の急斜面が見えた。左には太平洋が開ける。「この崖が地震で崩れたら、半島から石巻へ抜け出すのは時間がかかる」。相野谷さんは運転しながら厳しい表情を浮かべた。国道をさらに進むと、海に近い低地になっている。東日本大震災の津波で冠水した場所に差し掛かると、助手席に乗る妻の裕子さん(66)がつぶやいた。「震災の時はタイヤの高



崖崩れが発生した石川県志賀町福浦港地区と国道249号を結ぶ県道。近くの北陸電力志賀原発で事故があれば避難路としての機能を失っていた可能性がある。同日町中盤で2月21日、露木陽介撮影

国は、国道のバイパス工事を計画している。高台やトンネルを通ることで、女川町の中心部から自動車専用道「三陸沿岸道路」の石巻女川インターチェンジ(IC)までの約16キロの走

確実性欠いた放射線測定

1月の能登半島地震は、原発事故時の避難の要も揺るがしている。福島原発事故では、福島県浪江町の住民らは放射性物質が広がっていたとみられる北西方向に逃げた。放射性物質の拡散を予測する「緊急時迅速放射能影響予測ネットワークシステム」(SPREEDI)の測定結果が事故直後に公表されなかったためだ。

政府は2015年に「予測は不確実」として、事故時の避難の判断にはスピーディを使わない方針に転換。その代わりに、原発周辺に設けられ

揺らぐ判断材料

普段から大気中の放射線量を24時間体制で測っている「モニタリングポスト」(放射線測定器)を活用することにした。具体的には、原子炉の状況や、モニタリングポストで計測した空間線量の値、放射性物質が広がった方向などから、政府が避難する地域を判断する。

測定された空間線量の値は、普段から原子力規制委員会のウェブサイトですぐに公表されている。ところが、今回の能登半島地震では志賀原発周辺のモニタリングポスト約120カ所のうち、最大18カ所で通信トラブルが起き、一時的に計測できなかった。モニタリングポストのトラブルについて、規制委はかねて懸念を抱いていた。17年には、通信回線を複数にする対策を進めるよう、原発が建つ道県などに依頼。18年にも改めて対策の推進を要請し、これまでに石川県も含め関係道府県のほぼ全てで2回線が設けられた。

今回、再び通信トラブルが起きたが、規制委は2回線を3回線にするなど複数回線で備えるという姿勢を変えていない。それでも通信トラブルがあった場合には「車で移動する」可搬型モニタリングポストや測定器を載せた航空機で計測できる」という見解も示している。だが、地震による崖崩れなどで道路が寸断したら、可搬型モニタリングポストで円滑に計測できない可能性がある。航空機の場合も飛行中しか計測できず、測定結果をどのタイミングでどのように公表するのかが決まってい

原発の避難計画に詳しい広瀬弘忠・東京女子大名誉教授(災害リスク学)は「可搬型は道路に損傷がなくて初めて機能するので、寸断して使えないというのは大きな課題」と指摘する。

さらに「常時観測するシステムではない航空機で測って空間線量が低かったとしても、風向きが刻々と変わる中、

その地域が安全とは言えない。航空機による測定の結果が避難の判断材料になり得るのか」と警鐘を鳴らす。

福島原発事故まで4世代にわたる大家族で浪江町に住んでいた三瓶春江さん(64)「福島市」は「どっちの方向に放射性物質が飛んでいるのかわからない時、どこに逃げればいいのかとさきまよつのは、13年前の福島を見ていれば想像がつくのでは」と話す。

「能登半島地震は、原発事故が福島だけで終わる問題ではない」ということを国民に気づかせた。原発が、もっとみんなで考えなければいけない問題だということを示したんだと思う」

【山口智、土谷純一、尾崎修一】